

【目次】

はじめに…………… 3

I 香と王権

第一章 「太子」の誕生…………… 11

一 名香「太子」 13

香道書における「太子」／茶会記にみる名香「太子」／香書にみる「太子」／香木「太子」の実体／
法隆寺宝蔵開封の記録から

二 香木伝来神話の変転 37

香木伝来神話／沈か樟か／太子信仰と赤梅檀／吉野寺縁起と吉野

三 香る仏像 55

四 結び 60

第二章 蘭奢待と王権……………70

一 足利三代の截香 73

足利義満／足利義教／足利義政

二 織田信長の截香 95

三月二十三日、信長の使者来る／二十四日、相国寺茶会／二十五・二十六日、勅許下る／二十七日、
信長奈良下向／二十八日、開封そして截香／四月三日、相国寺茶会ふたび

三 結 び 137

II 香と連歌

第一章 香の名付け——連歌的切断……………149

一 『五月兩日記』 150

『五月兩日記』 概要／六種薫物合／六番香合／香量／香会——その中世的展開

二 『名香合』 182

肖柏判詞／三条西実隆跋文／宗祇の手紙（宗祇状）

三 連歌会と香 200

四 結 び 206

第二章 香の起源神話と規矩の成立…………… 213

一 『香之記』 213

二 香伝来神話 215

香伝来神話Ⅰ——起源譚／香と煙／神話と香り／香伝来神話Ⅱ——花山院と富士／香伝来神話Ⅲ——源実朝

三 規矩の成立 244

香分類法——五行思想／香の初破急／香炉の扱い・香の聞き方／四季の灰

四 結 び 263

第三章 名香と名香録…………… 272

一 名物と名香 273

名香と銘香／茶の湯における「名物」／楽器「名物」譚から

二 名香リスト 283

名物リストとの関連／名香録の成立

三 香分類法 292

建部隆勝と名香の聞き方／香りの判定と分類

四 結 び 301

結 び……………

307

香道人物関係図

名香一覧

あとがき

香道関係人物・資料索引

はじめに

現代に生きる私たちは、とかく〈いま〉〈目に見える〉という枠組みのなかでしかものごとを捉えられない傾向にあるように思う。伝統芸能の世界も同じことで、「茶道」「香道」といった今ある形のなかでの思考から抜け出すことは難しい。このままでは日本の伝統文化はその真の価値を見出せず、やがて崩壊、あるいは意図せぬ形へと変貌の一途をたどることになるのではないかとこの危機感を抱いている。それでは一体どのようにすればよいのだろうか。それは、「原点」へと思いを馳せることだろう。

原点回帰。伝統文化とみずからが、その根源的なつながりを見出せなくなっている現代にあつては、それらの成立した歴史へと思いを馳せることが、ことのほか重要になってくる。今に伝わる香道や茶道が成立した時代、京の地において、何が起こっていたのだろうか。それを考えることよつて初めて「場」は再生し、芸能はもとあつたエネルギーを取り戻すことができるのではないか。

これまで、さまざまな伝統文化や芸能について考えをめぐらせ、また拙いながらも実践に取り組んできたなかで、とりわけ香道の本を著すことになったのは、そもそも博士論文のテーマに香道をとりあげたからである。そのとき香道を選んだ理由は、以下のような思いからであつた。

香道は、日本文化の隠れた頂点である。

日本人は目に見えないものを尊ぶ心を大切にしてきた。とりわけ伝統文化においては、目に見える「型」を用いながら、実は目に見えない何かを伝えているということが多々あるのであって、そこをひもとかなければ、それらを理解したことにはならない。そしてそれは芸術・芸能に限ったことではない。たとえば私たちは神社で柏手をし、仏前に手をあわせ、また樹や岩に精霊が宿ると考える。そんな日本の感性を見事に——しかし隠された形で——あらわしているのが、香道ではないだろうか。

香道は、香りという、目に見えないものを「道」にまで仕立てあげた、世界にも稀なる芸術である。しかもこれをおよそ五百年ものあいだ伝えてきている。これは、実はとても不思議なことである。

本書は、香道という芸能がどのようにして成立したのかを明らかにすることを目的とする。また、そのことによって、香道を成り立たせている美意識がどのようなものであるかを検討する。そして、目に見えない香りというものを芸道として完成させた香道の美学をあぶりだしてみたいと考えている。

「香道の美学」というタイトルにして、本書の目的を「香道の成立」の解明においているのには、理由がある。一つにはそれは、香道の美学を解明するために香道とは何かを明らかにする必要があるからである。そして第二に、香道とは何かを解明するためには、香道がどのような歴史をたどってきたのかについて追究する必要があるからである。しかし、香道そのものの研究は甚だしく後れており、その成立史についてすらいまだに明らかになっていない。

たとえば、香道と比較的近い存在としてとりあげられる茶道や華道の歴史と比較してみても、香道研究の立ち後は明らかである。芸能史研究においては、一般的に、中世において「茶・花・香」と三つ巴に称される室内芸能の草創あるいは成立をみたとされている。これら仏教荘厳から発展した三つの芸能のうち、茶道および華道は早くから研究が進められ、芸能史のみならず、歴史学・社会学などの視点からの研究も展開されている。史料の翻刻も活発に進められ、主要な伝書は茶道、華道ともに戦前には翻刻出版されており（『茶道全集』創元社刊、一九三七年完結／『花道古書集成』大日本華道会刊、一九三〇年完結）、その後も改訂および他版の翻刻など多くの出版物が刊行されている。これに対し、香道の基本テキストは、『日本庶民文化史料集成 第十巻 数寄』（三一書房、一九七六年）に江戸時代の『香道軌範』（増補本）や『古今香鑑』等が翻刻されたものの、その後はかばかしい進捗はなく、香道研究の立ち後れの原因となってきた。近年、ようやくいくつかの伝書が翻刻され、研究の端緒が開かれてきたと言えよう。しかしながら、いまだに総合的な視野に立つ研究は行われていない。

そもそも、芸道について、何をもちて成立とするかについては、各分野で諸論のあるところであるが、とりわけ香道については、ほとんど議論すらなされてこなかったのが実情である。そのため本書では、「何をもちて香道とするのか」、つまり香道成立の要件についての検討も、同時に進めていかなければならないだろう。

香道の成立は、従来、江戸時代初期～中期と言われてきた^②。あるいは、流儀において始祖とされる三条西実隆（一四五五～一五三七）や志野宗信の時代を漠然と草創期とする考えも多い^③。

実隆および宗信については本文中で詳しく触れるが、実は香道の創始者と明確に言うことはできない。では、香道の成立が江戸時代かという点、そうとも言えないだろう。あまり注目されていないが、元龜三年（一五七二）の跋文がある『志野流捷徑』にはタイトルに「志野流」の文字がみえ、天正五年（一五七七）の奥書を持つ『香

道軌範⁽⁴⁾には「香道」の名称もみえる。もつとも、前者は家の流儀の意はあっても他と区別する意味での流派の意ではないだろうし、後者は今でいう香道と同じ意味かどうか俄かに判断はできない。とはいえ、「香道」の「軌範」であるからには、少なくともものちの「香道」に連なるものであることは確かであり、現に、同書の内容は現代の香道につながるものをかなり多く含んでいる。

したがって本書では、「香道の成立」について、『志野流捷徑』『香道軌範』といった書が確認される十六世紀半ばに注目し、香道をとりまく状況を追うことにする。具体的には、香道成立の過渡期を捉えることのできる『香之記』が書写され、足利義政に仮託された最初の香会の記録『五月雨日記』に載る香会が行われたとされる文明年間（一四六九〜八七）から、織田信長により東大寺正倉院の名香「蘭奢待」が截られた天正二年（一五七四）までの、おおよそ百年間を対象とし、香道成立のための契機を検討することで、その成立時期や経緯について、可能な限り描いてみたい。

本書は、香道研究にとって最も重要で、にもかかわらず最もあいまいにされてきた、香道成立に至る過程を解明するものである。これにより、何が香道を成立させたのかということ、すなわち、現代につながる香道の美学が浮かび上がるだろう。本研究の成果が、香道史の空隙を埋めるとともに、日本人にとって香りとは何かについての根源的な視座を拓く一助になればと思う。

(1) 代表的なものに、西山松之助『家元ものがたり』（産業経済新聞社、一九五六年）、同『家元の研究』（校倉書房、一九五九年）がある。

(2) たとえば、神保博行『香道ものがたり』（めいけい出版、一九九三年）では、「桃山時代におおよその規矩を整えた香

道は、一七世紀江戸時代の初頭には、道具その他を含めて完成の域に到達し、伝書も作製された。一八世紀のはじめには、蜂谷家により志野流の家元が確立し、香道は最盛期を迎える」と説明される。また、家元制については、「志野流は三条西実隆の信頼厚かったという志野宗信から宗温・省巴三代のあと、建部隆勝の推輓により蜂谷宗悟が四代を継ぎ、宗榮にはじまる家元制は、九代宗先の時完成されたという」とある。ただし、根拠は明確にされていない。

(3) 北小路功光『香道への招待』（宝文館出版、一九六九年）では、三条西実隆・志野宗信の時には始祖としての意識はないとしながら、足利義政・珠光までを「香道以前」の章に、実隆以後は「香道のなりたち」という章に収める。始祖を實際あるいは宗信とする考えは、江戸時代にはみられる。なお、『読史備要』（内外書籍、一九三八年）のように、佐々木道誉とするものも稀にある。

(4) 『香道軌範』は蜂谷宗悟伝とするが、天正五年（一五七七）の奥書を持つ竹幽文庫蔵本は「一釣」（詳細未詳）による伝となっている。なお、のちに蜂谷宗先・藤野昌章により増補され時代の下がる文書が紛れこんだ第二種本は『日本庶民文化史料集成 第十巻 数寄』に翻刻されている（川嶋將生による）。矢野環「香道の古伝書——『習見聴諺集』所収伝書など——」（『儀礼文化』第二三号、一九九六年）参照。

第一章 「太子」の誕生

香は、仏教とともに伝来したと言われている。⁽¹⁾当初は、場を清める機能が求められるとともに実際の薬効のあるものとして、信仰の場における儀礼や供養に用いられた。塗香や焼香などは寺院や家庭の仏壇で現在も行われているとおりである。これが、平安時代には、衣服や室内を薫らせる薫物⁽²⁾（調合香のこと）として生活の場に取り入れられ、平安時代末期には薫物の「方」⁽³⁾（＝調合法）を集大成した『薫集類抄』⁽²⁾（藤原範兼編／長寛三年〔一六五〕）が生まれるに至る。伝存する「方」の記録からは、当時の人々が香に関する高度な知識と技術を蓄えていたことがわかる。『源氏物語』では、薫物調合の些細な違いでも「人」が判別され、家の血筋をもあらわす秘伝の「方」が重視されるなど、香は王朝サロンにとつてなくてはならない要素となっていた。また、歌合や菊合の風流に沈香で洲浜を作った記録がみえ、⁽³⁾歌合に倣い、薫物合が行われていたことは確かであろう。

香木は、もとより日本に産出せず入手しがたい貴重なものであったが、鎌倉時代末期には中国からの輸入品の流通が増え、さまざまな種類の香木が出回ると同時に、薫物ではなく、沈香の香木そのものが単独で鑑賞されるようになる。建武元年（一一三三）には「二条河原の落書」に「茶香十炷ノ寄合モ鎌倉鈞ニ有鹿卜都ハイト、倍増ス」と歌われ、香の優劣を競う「十炷香」⁽⁴⁾の会が流行した。『太平記』に、佐々木道誉が一斤もの名香を一度

に焚いて「香風四方に散じて、人皆浮香世界の中に在が如し」とあ
るのは道誉の婆娑羅ぶりの証の一とされる。「香」は奢侈品の象徴
でもあったが、同時に、それだけ入手可能なものとなっていたこと
がわかる。十四世紀には、よい香に名が付けられた「名香」の存在
が確認され、十六世紀には名香を競わせる「名香合」などの香会が
行われていた。永祿年間（一五五八〜七〇）には、名香が格付け・選
定され、「名香録」として伝授されるに至るのである。⁴⁾

陽明文庫に「名香六十一種名寄文字鎖」（江戸時代中期成立）と呼
ばれる文字群が残されている（図1）。中央に大字にて「それ名香
のその中に、匂ひうへなき蘭、奢待、いかにおとらぬ法隆寺、遣遥
三芳野、紅塵や、宿の」とみえ、その後は小さな文字で「枯木の春
の花、流れもたえせぬ中川と」云々と三百余の文字が散らし書きさ
れている。傍点部は、すべて香の名前である。香道においては、古くから伝来されている重要な香がいくつか定
められており、百種、百二十種、五十種などさまざまあるが、なかでも有名なのがこの六十一種である。香道家
の伝承によれば、佐々木道誉、三条西実隆、志野宗信を経て定められたとされることもあり、しばしば香席にお
いて必要とされる基本的な知識として尊ばれてきた。このような傾向は、江戸時代にはすでにみられ、入門者が
これを覚えるために作られたのがこの「名香六十一種名寄文字鎖」なのである。この文字鎖の文献上の初出は

『校正十炷香之記』であり、最初の二つのみ順序を入れ替えて、大江英位が作成したとされる。現在においても
使われており、香道家のあいだでは常識のごとくみなされている。この史料は、香席において香銘が重要な位置

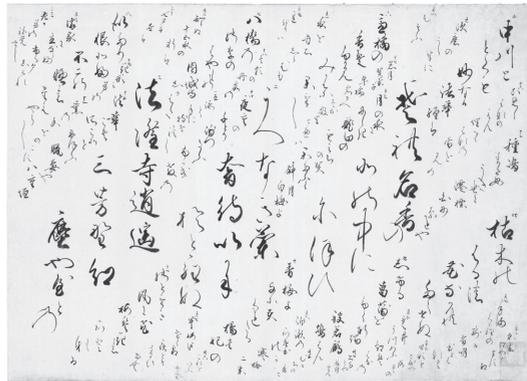


図1 「名香六十一種名寄文字鎖」
(陽明文庫蔵)

を占める過程を示すものとして興味深い。

この「名寄文字鎖」における香名の順序には意味があり、最初の方に出てくる香が後に出てくるものよりも有名であることはおおかた言えよう。なかでも著名なのが、冒頭の「蘭奢待」であろう。しかし、文字鎖ができる以前には、名香の最初は蘭奢待ではなく、二番目に登場する「太子」（別名「法隆寺」）であった。「太子」は、文字鎖登場以前には名香の第一として、また、その登場以後も、第二の名香として尊ばれているにもかかわらず、蘭奢待に比べれば知名度が低く、文献に登場する割合も低い。小説や説話、歌舞伎などにおいても蘭奢待は頻繁に登場するものの、「太子」については、ほとんどそういったストーリーが付加されることがない。このことを反映するかのよう、現在においても「太子」に関する研究は比較的なされてこなかった。

ここでは、名香「太子」に注目し、その誕生とその後の展開を追うことにしたい。後に述べるように、「太子」は香木伝来の最初とされており、仏教とともに伝来した香がのちに香道にまで発展する過程の一端を追うことにもなるだろう。

一 名香「太子」

(1) 香道書における「太子」

最初に、香道において「太子」がこれまでどのように理解されてきたのかについて、現在入手可能な香道家による書や一般書で確認しておこう。

①この沈水は後世香道に於いて、その銘を「法隆寺」、また「太子」、また「手筒の太子」とつけて最も珍重し、いま正倉院に献納御物として蔵せらる。
(早川甚三『香道』八雲書林、一九四三年)

②淡路島に流れついた香木だが、話に尾鱈がついて、これが正倉院に納まって例の蘭奢待になったとか、聖徳

太子がこの香木で仏像をきざんだとかなると、少々眉唾ものなのである。

（北小路功光『香道への招待』宝文館出版、一九六九年）

③香木の名。法隆寺の別名。分類は佐曾羅。香味は苦甘酸。六十一種名香の第一。（『日本国語大辞典』小学館）
 ④中世以来「太子」と名付けられ、東大寺の蘭奢待や全浅香（紅沈香）と並び、天下の名香に数えられてきた品である。明治初年に法隆寺から皇室に献上され、いわゆる法隆寺宝物の一部として、現在は東京国立博物館に入っている。
 （諸江辰男「法隆寺の名香「太子香」は白檀である」『香料』第一七二号、一九九一年）

⑤『日本書紀』によると、推古三年淡路島に漂着した日本伝来最初の香木。法隆寺に納められたことから「法隆寺」とも呼ばれた。そのため有名な香木で、『天王寺屋会記』には、天正八年十一月八日に津田宗及が催した茶会でたいたとの記録が残っている。
 （神保博行『香道の歴史事典』柏書房、二〇〇三年）

⑥「法隆寺」は別名「太子」とも呼ばれ、匂いは蘭奢待には及ばないが、聖徳太子ご自愛の香木であったとにも、わが国における焚香の始めとして……（荻須昭大「名香について」『増補版 香と香道』雄山閣、二〇〇四年）
 ⑦最も古い香木として、法隆寺宝物には白檀香・栴檀香があり、ペルシヤの古い文字や貿易に携わったソグド人の文字が確認されています。古来名を「太子」として著名であり、名香の第二位（江戸中期からは第二位）です。寛元元年（一二四三）には藤原道家がわざわざ見えています。後に信長も一片を得ました。

（矢野環ほか『よくわかる伝統文化の歴史②』淡交社、二〇〇六年）

以上、従来の研究および香道家における「太子」に関する認識をみてきたが、伝来から現在の所蔵に至るまで見解が一致しているとはいえない。

もつとも、伝来については、

1、推古三年淡路島に漂着した日本伝来最初の香木

2、聖徳太子による、日本最初の焚香

3、最も古い香木

4、淡路島に流れ着いた香木

などとされ、『日本書紀』推古天皇三年（五九五）条に載る香木であり、日本で最も古いという認識でほぼ一致している。2の「聖徳太子ご自愛」という内容も、後にみるように、この伝来が太子信仰において醸成されたものであり、推古三年に淡路島に漂着したものであるという認識の上にあるものである。

だが、その他の内容説明については、名香の第一であることや、その分類に触れるものなど、さまざまに述べられてはいるものの、統一された認識とは言えない。『日本書紀』に載るように、六世紀に伝来したとして、どのような経緯で「太子」と名付けられ、香道における地位を築いていったのかを明確に記したものはない。最も古い香木で、しかも香木の第一と言われる「太子」であるが、実は、その履歴すら明らかではないのである。

以下にみるように、法隆寺の宝物（現在は、東京国立博物館所蔵）には香木が三点納められており、そのうちの二点が白檀、一点が沈香で、八世紀には収蔵されていたことが確かめられる。ところが、これら三点の香木のうち、**Ⓐ**いづれが「太子」であるか、**Ⓑ**いつから「太子」の名が付いたのか、また、**Ⓒ**法隆寺の香木と、世に言う香木「太子」が同一のものかどうかなど、不明な点は多い。

Ⓑについては、多くの香木がそうであるように、真偽は確かめにくく、分木される過程ですり替えられることなども、少なくはなかったと予想される。ここではその一つひとつの真偽を問うわけではなく、世に名香「太子」の存在が語られ始めた時に、法隆寺所蔵の香木を截りとしたものが確かにあって、それが「太子」と名付けられたのかどうか、ということを問題にしたい。

Ⓐについては、東大寺正倉院所蔵の香木「蘭奢待」が、東大寺では古くから「黄熟香」という名を持ち、これ



図3 法隆寺蔵の香木「沈水香」
(東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives)

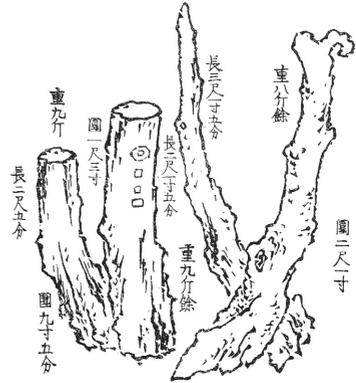


図2 「沈水香之図」
(『大和名所図絵』卷三より)

こそが蘭奢待であると一対一で対応できるものが存在しているのに比べ、「太子」についてはそれがいずれかわからないという不思議である。しかも、素材そのものも「白檀」とされたり「沈香」とされたりして、事実とは異なる言説も多い。

最後に、⑥の疑問である。これについては、多くの香道家がほとんど気づいてないように思える。あるいは、気づかないようにしているのか、また、気づいても仕方がないとしているのかもしれない。伝説なのだから、と。しかし、最も不審に思われるのは、この⑥の疑問である。第Ⅱ部で詳しく述べるが、「名付け」の行為は、香道にとって最も重要な要素の一つであり、歴史的な過程においても、大事な段階である。したがって「太子」も他にもれず、「名付け」の問題から迫ってみたいと思う。

その前に、まず、香道における「太子」がどのように捉えられてきたのかについて、確認しておこう。たとえば、江戸時代に書かれた香道伝書には、以下のようにある。

香木出生

法隆寺 手筈太子ともいへり。六十一種第一ノ香なり。沈水香ともいふ。

日本紀曰

推古天皇三年夏四月、沈水漂著ス於淡路島。其大一围。島人不知沈水、以交薪燒於竈。其烟氣遠薰、則異、以獻之帝皇。編年紀推古天皇三年乙卯四月、於土佐国南海、每夜光物、其声如雷、經三十箇日、寄淡路国南岸、其勢一围八尺、其香無比類。島人不知沈水、多用薪畢、其烟氣遠薰異、聖德太子見之、称沈水香者鷄舌、香其華丁子、其油薰陸、以不歷年称浅香、以歷年称沈水、依崇仏法釈梵徳天之浮送也。南天竺南海岸、称梅檀香木齋是也。帝取之造観音像。時々放光令太子講勝鬘經二三尺蓮華降、其所仍建立今橘寺、大和国高市郡、是也⁽⁷⁾

識語に「享保十四年（一七二九）己酉卯月下旬」とあり、香道家・大沢梅翁軒によるものである。梅翁軒は志野流の一つの流れに位置する人物で、御家流にも多少影響を与えたとされる⁽⁸⁾。

香木の由来が書かれた部分の最初に、太子（法隆寺）が挙げられている。「手筈太子」とは、現在宮内庁に所蔵されている木画の箱のことで、なかには白檀と思われる削り屑が納められている。この頃には、六十一種の名香が浸透していたとみられ、「第一ノ香なり」とする。そして、「沈水香」すなわち沈香であるという。さらに、「日本紀曰」と、その由来を述べる。これによれば、推古天皇の三年に淡路島に漂着した香木が「太子」であり、島人がそれと知らずに焚いたところ、不思議に遠くまでよい薫りがしたというので、帝に献上した。また同じく土佐の南海上に毎夜光るものがあり、雷鳴がして、三十日を経て淡路の南岸に着いたのだという。これも同じくよい薫りがしたので聖德太子が見つけて沈水香であると言った。そして、沈水香は鷄舌で、またその花は丁子、油は薰陸、年を経ないものは浅香、年を経たものは沈水であると言ったという。これは、有り難い仏法によって南天竺の南海岸の梅檀香木が海を越えて送られてきたものだといひ、帝がこれで観音像を造らせたという。観音像は、時々光を放ち、太子が勝鬘経を講じると二三尺もの蓮華が降り、そこに今橘寺が建っているのである、と。「日本紀曰」以下は、おおよそ記紀神話に載る香木伝来記事を元にしたものであるが、最後の「勝鬘経」云々に

ついで、『聖徳太子伝暦』に、太子がこの地で勝鬘経を講じたとき、瑞祥があり、それによって仏堂を建立したとある橘寺の縁起である。『法隆寺東院資財帳』には、推古天皇十四年七月条に「天皇詔太子日、於朕前講説勝鬘経、則依詔太子講説三日、講竟夜蓮花零、花長二三尺溢方三四丈之地、則其地誓立寺院、是今菩提寺也」と、同話が載る。このように、香道においては、香木「太子」の由来が記紀の香木伝来記事だけではなく、太子にまつわる橘寺の縁起とも結びつけられて語られていることが知られるのである。ちなみに、この記事の後、名香として並び称せられる「蘭奢待」についての記載が続くので、みておきたい。

東大寺 蘭大者待是ナリ。黄熟香ト云日本ニテ蘭大者待ト改。長五尺式寸指渡一尺三寸余末口三寸八分。勅封ナリ。

聖武帝御宇自漢士奉獻之。東大寺宝蔵ニアリ。

香木「東大寺」は蘭奢待のことを指し、元は「黄熟香」と言ったが、日本で「蘭奢待」と改められたとする。大きさなどが記され、また東大寺の勅封蔵に納められており、聖武天皇の折に「漢士」すなわち中国人により献上されたとある。「太子」に比べて、あまりに簡素な説明である。さらに、蘭奢待の次に載る「紅塵」に至っては、「大紅沈 紅塵香是ナリ。長三尺五寸指渡一尺八寸末口九寸余。東大寺宝蔵ニアリ」とあるのみであり、その後は名のみのレストランになるのである。

香道においては、香木の由来がさまざまに語られてきたが、そのなかでも「太子」は別格の扱いを受けてきたことがみてとれよう。ところが、先の一例をとっても、記述に混乱がみられることがわかる。「太子」は沈香なのか白檀なのか、また、伝来した香木はその後仏像になったというが、本当なのだろうか。もしそうであるとするなら、橘寺の仏像なのだろうか。とすると、法隆寺の寺宝として現存する香木との関係はいかなるものなのだろうか。さまざまな疑念がわき起こってくる。

ここではまず、香木としての「太子」の名のみられる記録を整理し、次に、香道における「太子」についての言説について改めて確認し、続いて、名香「太子」の成立にかかわる思想的な背景に迫っていこうと思う。

(2) 茶会記にみる名香「太子」

名香としての「太子」の名が記録上にあらわれるのは、確認される限りにおいては、茶会記における記録が最も早い。『宗達他会記』⁽⁹⁾弘治二年（一五五六）四月条に、以下のようにみえる。

同卯月 神明町 宗全会 人数 開 達 忻

一 しやうはり、小板二

一 かたつき、四方盆

一 香をたかれ候、太子、

戦国時代の堺の町人、笠原宗全が催した会に、開想斎、天王寺屋宗達、薩摩屋宗忻の三名が客となった。笠原宗全は、侘助宗全とも言われ、彼の所持した肩衝は「侘助肩衝」と称せられた。のちに高山右近の手に渡り、徳川將軍家伝来の品となる。ここでもこの一品を用いたことがみえ、おそらく茶会の前か後に、香「太子」を炷いたものと思われる。

次にみられるのが、永禄三年（一五六〇）六月の次の会記である。

同六月五日晩 隆勝たけへ

一 ちやわん 香二種、らんしや、太子、

亭主である建部隆勝はむしろ香道で名の知れた人物で、『山上宗二記』に「名香の道の名人」と称せられている。⁽¹⁰⁾ここでは、宗達一人を呼んでの夜の一会に、蘭奢待と太子を炷いたことがわかる。

次は、少し年数が開いて、天正八年（二五八〇）十月二日、『宗及他会記』に載る記事である。

同拾月二日 帰津之路次 於法隆寺

太子御宝物拝見候、太子香一包給候、

上様へ従法隆寺上り申候其次手ニ、別当取テヲカレ候ヲ、惟任日向殿へ被進之候、其時宗及ニ給候、従法隆寺、

津田宗及（？）（一五二九）は同年九月二十六日に「於南都四聖坊、道具拝見」、すなわち東大寺の四聖（良弁・聖武天皇・行基・菩提僊那）を祀る坊で道具を拝見したが、これは滝川一益とともに大和檢地奉行として奈良に向していた惟任日向守（明智光秀）に随行したものであった。三十日には郡山城主の筒井順慶と高取城主の越智玄蕃の両人の茶壺の口切があったと記されている。そのあいだ、南都に逗留していたものとみえ、十月二日に堺津に帰ったが、その途次に法隆寺に立ち寄った。その折の記事である。宗及は、法隆寺宝物を拝見し、「太子香一包」を得た。それは、「上様」すなわち織田信長に法隆寺が「太子」をさしあげた折に、別当が別に取っておいたのを、光秀に進上し、その時宗及もおこぼれに与かったというのである。『天王寺屋会記』には茶会以外の記事は珍しく、よほど特筆すべき出来事だったことがうかがえる。

この翌月の天正八年十一月、今度は、自らが開いた茶会の記録『宗及自会記』に「太子」が載る。

同十一月八日朝 はかた 宗叱 一人

一 床ニ香炉・香合、袋ニ、盆なしニ、床ニならへ候、但、脇方ニ

一 炉 フトン、クサリニ、後ニ籠ヨリいもかしら、茶立時、

一 香炉 茶之前ニ火ヲとりて、太子一種焼申候

茶之前ニ盆、取出し、すへ候て、床へ上申候

結 び

推古三年（五九五）、淡路島に沈香木が流れつき、島の人々が焼いたところ常ならぬ芳香が漂ったため、朝廷へ献上した。これが、『日本書紀』に伝わる香木伝来の最初と言われる神話である。この話が中世における太子信仰に取り込まれ、樹木への信仰と相俟ち名香の第一「太子」が誕生するのは、みてきたとおりである。その間の事情はともあれ、香木伝来から千年を経た十六世紀前半に、世界にも稀な嗅覚の芸能である「香道」が成立する。結びとして、各章で論じたことを改めてまとめておきたい。

第Ⅰ部「香と王権」

第一章「太子」の誕生

香道において現在最も重視される「名香」のうち、江戸中期まで第一とされた「太子」の成立について考察した。これまで「太子」は、最も古い香木とされてきたが、実は中世における太子信仰のなかで、誕生したものであることを解明した。

第二章 蘭奢待と王権

「太子」とともに名香の一、二を争う「蘭奢待」について、足利將軍家に始まる「截香」の記録を追った。香木の中で最も名の知られた存在でありながら、誰がどのような経緯で截り、どのような意味がもたされてきたかについては、これまでほとんど解明されてこなかったが、至徳二年（一三八九）の足利義満による截香から、天正二年（一五七四）の織田信長による蘭奢待截香までの記録を詳細に分析することで、香と権力が最も激しく結びつく瞬間を捉えることができた。信長の截香は、それまでの香に対する観念を塗り替えると同時に、以後の香の位置づけを決定するものであった。

第Ⅱ部 香と連歌

第一章 香の名付け——連歌的切斷

最初の香会の記録で足利義政に仮託された『五月兩日記』および、連歌師の牡丹花肖柏が判詞を著した『名香合』を読み解くことで、香道成立に連歌師が深くかかわっていたこと、連歌的な発想が香道成立に大きく寄与したことを明らかにした。

第二章 香の起源神話と規矩の成立

香に関する古代から中世への過渡期の思想を留める『香之記』を対象とし、香道に込められた古代的な香りの思想と香道の起源神話の発生について考察した。『香之記』はこれまで香道研究においてほとんどとりあげられなかったことがなく、今回使用した本文は初公刊となるものである。また、香道成立に欠かせない香会の形式や灰形などについて検討し、伝授すべき規矩が形づくられ、「家」や流儀の意識がみられることを確認した。

第三章 名香と名香録

香道の成立にとって最も重要ともいえる「名香」について、「名物」そのものの成立に立ち返り、「名物」観から名香のリストが編集され、香の分類法が生まれる過程について考察した。茶器や楽器も含めて幅広く「名物」を研究するものはこれまでになく、また、名香のリストについても、初めてその全貌の一端と位置づけを確認した。

以上、香道の成立のための重要な局面として、第Ⅰ部に王権の問題を、第Ⅱ部に連歌の問題をとりあげたが、第Ⅰ部にも連歌的思考がかかわっており、第Ⅱ部にも王権の問題がからんでいた。

またその際、香道成立の契機として、次の要素をとりだし、検討した。すなわち、①連歌的思考、②起源神話の成立、③規矩の成立、④伝授形態の発生による香書の発行、⑤名香録の成立、である。

これらすべての契機にかかわり、また「王権」と「連歌」という大きな課題を貫くのは、「名香」であった。香道成立は、「名香」の生成をめぐる王権と連歌の問題と言い換えてもよいだろう。

名物の香の意である「名香」には、香木の持つ香りの良さとともに、その「名」に大きな意味が込められている。その名の多くは和歌や物語から採られる雅名であり、香会においては、香りよりも、むしろ「名」の優れているものが良しとされた（『五月雨日記』）。香道とは、嗅覚の芸能でありながら、その内実は、香りに付けられた名をもって遊ぶ、言葉の芸能だったといっても過言ではない。

本書では、連歌こそが香道を支える最大の原理であることを、香書や香会の記録から明らかにした。実際、香会を主導したのは連歌師であった。連歌師は、連歌という言葉世界から、匂い・香りという非言語世界へと遊びの域を拡げ、一つには和漢教養すなわち「雅び」の具現の場として、また一つには、連歌そのものに備わる変転

する言語宇宙の新たな実践の場として、香会を開き、香道成立への大きな基盤を築いたのである。

言葉と香りとは連歌的原理による切り結び方によって常に新たな世界を開いていくのが、香会の最大の魅力であり、以後「香道」を成立させる、大きなエネルギー源になったと考えられる。

一方で、後世、香道の始祖とされたのは、三条西実隆であった。『五月雨日記』が、源氏物語の〈もどき〉を遊んだように、つねに香道が立ち返ろうとする原点は『源氏物語』であり、和歌を中心とする王朝文学世界であった。中世にわき起こった香道とは、いわば、香り(匂い)によって王朝の記憶を回復しようとする動きであり、現代にまで「芸道」として伝えられている香道の本質なのだといえよう。

その王朝の記憶を取り戻すための最大のよすがとなるのが、和歌からとられた「名」である。

香に付けられた「名」は、十六世紀半ばに分類・整理され、リストアップされる。「名香録」と呼ばれるリストの誕生である。当初数百を数えた複数の名香群から、志野宗温らにより六十種余が選定されたと考えられ、のちに「六十一種名香」と呼ばれる一群となり固定化されるようになる。「名香」は権威化され、信長が蘭奢待を截香する折には、王権を象徴するほどにもなっていた。

これらの、香の持つ権威性と宗教性、文化性のすべてが華開いたのが、中世末期の文明年間から天正年間に至る百年であった。言い換えれば、香りと名の誉れを合わせ持つ「名香」を遊ぶ芸能が生まれたのが文明年間の頃であり、これが最高の権威を持ったのが、信長による蘭奢待截香が行われた天正年間である、と言えよう。すなわちこの百年が香道成立のための最も重要な期間であり、より具体的には、名香録が作成された天文・永禄年間(一五三二―六九)頃、香道が成立したと言つてよいのではないだろうか。

もつとも、現在の香道につながる家元制度の成立・確立のためには、江戸中期を待たなければならぬが、規矩作法と伝書が整い、道具、名香録、伝来神話が揃い、「香道」という芸能の範囲をあらわす呼称が一度ならず

みられる上は、「香道」が成立していたと考えられるのである。

以上により、香道成立の時期がおおよそ特定されたとともに、香道成立に至る経緯——何が香道を成立させたのか——が明らかになった。

香道とは、連歌的原理によって切り結ばれた嗅覚と言語の芸能であり、宗教性と政治性（王権）が深くかかわりながら、中世末期、十六世紀半ばに成立した美学なのである。

あとがき

京は御所の西、江戸時代の儒者皆川淇園（一七三四〜一八〇七）の学問所「弘道館」址の数寄屋建築（現・有斐斎弘道館）が取り壊しの危機に遭っていたところを、伝統文化を通じた人間育成機関として再生させて九年。ジャングルのようだった庭も、多くの人々の手によって甦った。その間、つねに念頭にあったのは中世における香や茶、連歌のサロンであった。そして今、伝統文化を学び、伝える場が「在る」ことの重要性をますます感じている。



本書を執筆中の、秋の一日の、茶事の朝のことだった。

有斐斎弘道館は、通りに面した門から北へと細く長い露地がのびているのだが、古い石畳の石は傾き、石と石の間には小さな雑草がそこかしこに頭を出していて、また夜に落ちた椎の実が挟まったりしている。石畳の脇は苔に覆われているのだが、その苔の上には樹木の葉が間断なく舞い降りてくる。その一つひとつを、取り除き、清めていく。

こうして無心に庭の手入れをしていて、ふと、腑に落ちたことがあった。そうか、私たちは、「美」のために、庭を清めてきたのだと。

誰のためでもない、「美」のためなのだ。

それは、九年前には気がつかなかったことだった。時に庭の手入れが辛く感じることもあったし、誰かに

褒めてもらいたいこともあったが、それはまだ、庭との「対話」ができていなかったのだろう。むろん、露地庭は客のために清めるのだが、しかしそれを前提とした上で、究極的には誰のためでもなく、ましてや自分のためでもなく、「美」のために為しているのではなからうかと。

「美」という規範を持ち、「美」を目ざすがために、人は我欲を超え、自然を愛し、自然と語らい、芸術を培い、平和で豊かな心を育むことができるのではないだろうか。

「何のために庭が必要なのか?」「何のために非効率的な町家を守るのか?」「そもそも伝統を守る必要があるのか?」というような愚問を日々浴びせられ、自問せざるをえない現代の病巣とは、この「美」を見失っている状態ではないだろうか。

「美」は時に目に見えるものではあるけれども、その基準を数字で測ることはできない。美を感じるためには、美に心を動かされる経験が必要だが、とりわけ伝統的な美に触れる場が、日常から失われていくことを危惧している。日本人が長い年月をかけて培ってきた美の感性は、いま、失われようとしているのではないか。

本書は、博士論文として二〇〇八年九月に東京大学大学院総合文化研究科（超域文化科学専攻表象文化論研究室）に提出したものに、一部加筆訂正をしたものである。論文提出時の内容であるため、最新の研究十分に反映できていないことを、お断りさせていただきたい。

博士論文の審査にあたっては、大学院時代、歌舞伎や能、中世神道など、さまざまに興味の対象を変えて定まらない私を大らかに指導してくださった東京大学教授の松岡心平先生、同じく東京大学教授（当時）の小林康夫先生、田中純先生、立命館大学特命教授（当時）の川嶋將生先生、同志社大学教授の矢野環先生に

お世話になった。改めて感謝を申し上げる。とりわけ矢野先生には、博士論文執筆にあたって、多くの文献をご教示いただいたが、このたびの出版にあたり、再び先生の研究室を訪ね、改めて貴重なご指摘をいただくことができた。また、拙い論考に目を通してくださった、能楽師で連歌研究者の有松遼一さん、日本学術振興会研究員の原瑠璃彦さん、同志社大学の御手洗靖大さんに御礼申し上げます。そして、博士論文を執筆し始めた時に訪れ、香の歴史に思いを馳せた思い出深い寺である、世尊寺（奈良県吉野郡大淀町）の本山一路住職には、このたびの出版に際し、表紙に「現光寺縁起絵巻」の掲載を快くお許しくださり、また大淀町教育委員会の松田度氏にお世話になった。その他、掲載のご許可を賜りました関係諸機関のみなさまに感謝申し上げます。さらに、香道志野流次期二十一世蜂谷宗苾氏よりお言葉を頂戴することができたのは、光栄であった。最後に、出版の機会をいただいた思文閣出版の原宏一氏と、的確なアドバイスで導いてくださった編集の大地亜希子氏に深く御礼申し上げます。

本書は、香道とは何かという問いを通して、日本人の、目に見えないものに対する感性を問うてきた。香道の美学を十分に語りつくすことができたわけではないが、それを語るための、一つの基盤のようなもの——美を語る庭——が生み出したのではないかと思っている。そんな、日本の美を語る庭が、再び日常にふれることを心から願って、筆をおきたい。

二〇一七年十月吉日

濱崎加奈子